

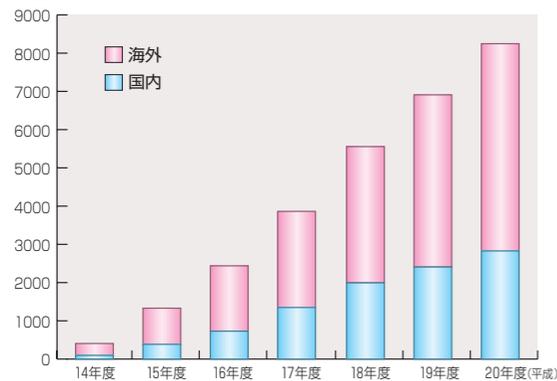
●知的クラスター創成事業

知的クラスター創成事業の成果

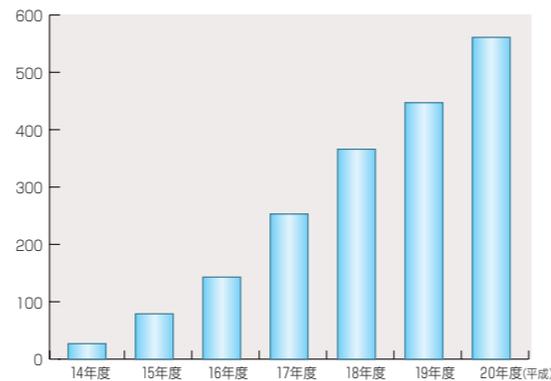
知的クラスター創成事業のこれまでの成果データ

知的クラスター創成事業では、知の拠点たる大学等を核とし、関連研究機関、研究開発型企業等による国際的な競争力のある技術革新のための集積（知的クラスター）の創成を目指して産学官共同研究等を実施しており、これまでの取組により、以下のような成果が生み出されました。

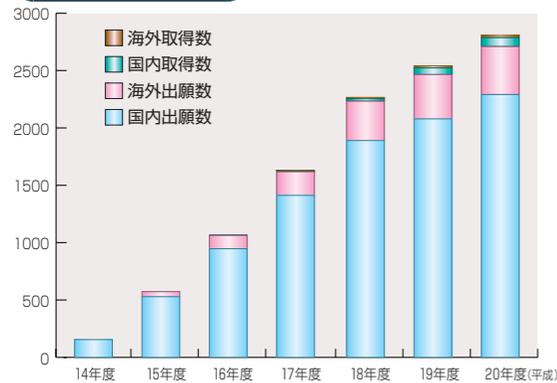
論文数（累積）



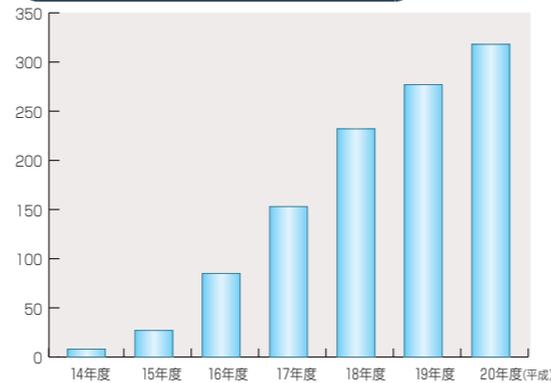
受賞件数（累積）



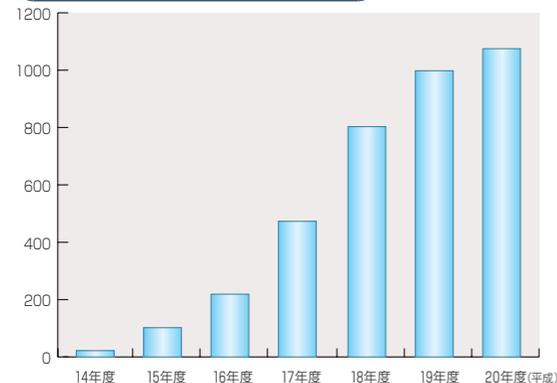
特許出願件数（累積）



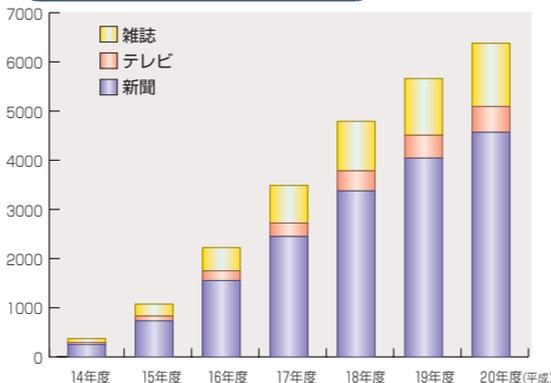
成果が他事業に採択された件数（累積）



商品化、実用化、企業化件数（累積）



報道で取り上げられた件数（累積）



●知的クラスター創成事業

事業化戦略事例

（研究開発マネジメントによる事業化の促進事例）

大学等の研究開発成果を実用化につなげ、イノベーションを創出するためには、知的クラスター創成事業全体のマネジメントが非常に重要となります。事業を実施している各地域では、地域の特色や分野の特性、研究開発の進捗状況等に合わせた事業化戦略のもと、独自のマネジメントシステムを構築しています。

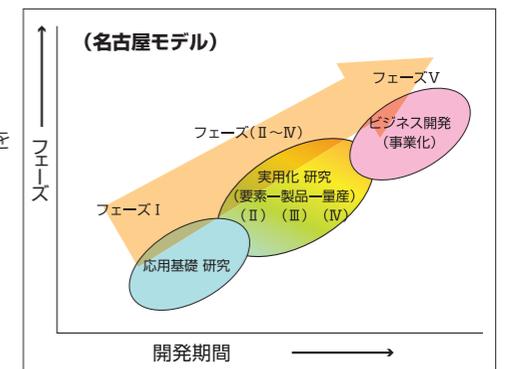
東海広域地域の研究開発マネジメントシステム

東海広域地域（第Ⅰ期：愛知・名古屋地域）では、民間企業の仕事の進め方を参考とした『名古屋モデル』と呼ばれる研究開発マネジメントシステムを実践し、知的クラスター本部による研究開発のフェーズ管理と同時並行開発体制（コンカレントマネジメント）により、事業化にむけたスピード感のある研究開発を実現しています。

1. 研究開発フェーズ管理

- ・ 出口を明確化しつつ、研究開発のフェーズを定義
- ・ 知的クラスター本部が個々の課題毎の進捗を管理し、遅れているものについては資源を集中的に投下するなど、総合的なフェーズアップを実現

- フェーズ（Ⅰ） 応用基礎研究：
実用化につながる独創的なシーズの創出を目指す
- フェーズ（Ⅱ） 要素開発：
探索したシーズを基に具体的「ターゲット」を定め必要な技術開発を実施
- フェーズ（Ⅲ） 製品開発：
要素技術を統合・融合し、「ターゲット」を定め試作・改良を実施
- フェーズ（Ⅳ） 量産技術開発：
「ターゲット」を量産するための技術開発を実施
- フェーズ（Ⅴ） ビジネス開発：
ビジネスモデルの構築及び「ターゲット」の商品化



2. 同時並行開発体制（コンカレントマネジメント）

- ・ 最終的な製品化を実現するためには、複数の要素技術の統合が必要不可欠。
- ・ 大学をプラットフォームにして、製品・分野の異なった企業が同一の開発テーマ（最終目標）を共有し、同時並行的にフェーズアップする体制を整備・多数の企業の参画・連携によって、新たに発生する課題の共有と解決が可能となり、スピード感のある研究開発を実現

技術移転のコンカレントマネジメント（一例）

（高効率パワーデバイス部材フォーメーション）

